

# 詩とことば

＊1月

阿部 公彦  
あべ まさひこ

筆者の同年代の友人たちも、五〇歳ともなると老いが目立つ。白髪。老眼。腰痛。何より気になるのは、言動の繰り返しだ。さっき言ったのに忘れてる……。赤瀬川原平は『老人力』（ちくま文庫）の中で「忘却力」の効用を説くが、言う方は忘れても、聞かされる方は忘れていない。「そういえばさ、」とくると、もう次に何を言うかがわかる。

でも、同じことを言うのは、忘れるせいだけではない。ことばに酔っている。酔いながら恨み、嘆き、憧れ、愛おしむ。そう。これはまさに詩人のやり口だ。詩では情念にどっぷり浸ることが許される。たとえそこにナルシズムの匂いがしても。自分のことばがわんわんと響くくらいでないで、詩など書けないのではないか。

ただ、他人の酔いを共有するのは簡単ではない。そこで必要になるのが「つなぎ役」。愛と情念と夢が横溢するあちら側の世界と、しらっと散文的なこちら側の世界との間に橋をかけてくれる人。池澤夏樹『詩のなぐさめ』（岩波書

店）は、岩波文庫で読める古今東西の詩への入り口を、著者特有のさっぱりとキレのいい、ちょっと寂しさも漂う口調で静かに用意してくれる。西はイエイツ、シェイクスピア、ブレイクからマヤコフスキー、プレヴェール、東は岑参、奄美民謡、『古事記』、三好達治まで。それぞれに話の枕があり、語り口も自在。でも、作品の邪魔をしないよう著者は途中でそっと身を引く。粹な身のこなしだ。少し前になるが、石田千『唄めぐり』（新潮社）も一風変わった「つなぎ役」。民謡の故郷を訪ねてまわる紀行だが、脂気のないさらさらした紹介文のあちこちに小さな物語が埋めこまれ、主役となる歌詞の周囲にいつの間にか祭の匂いが立っている。

## そっと身を引く「つなぎ役」

加島祥造が亡くなった。北村太郎や田村隆一と知り合ったのがきっかけで詩と出会った「荒地派」とされたが、注目されたのは六十歳をすぎてから。若い頃の作品も含め独特の軽さがあり、ふっと身を引き離す力の抜き加減が絶妙、後の漢詩や老荘思想への関心ともつながる。フォークナー、トウエイン、マラマッドなど海外文学の紹介者、翻訳者として信頼されたのもそうした力の使い方と関係がありそうだ。

（東大准教授）